

## 信仰の成長

ヨハネ福音書4:46-54  
【新改訳2017】

- 4:46 イエスは再びガリラヤのカナに行かれた。イエスが水をぶどう酒にされた場所である。さてカペナウムに、ある王室の役人がいて、その息子が病気であった。
- 4:47 この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞いて、イエスのところに行った。そして、下って来て息子を癒やして下さるよう願った。息子が死にかかっていたのである。
- 4:48 イエスは彼に言われた。「あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じません。」
- 4:49 王室の役人はイエスに言った。「主よ。どうか子どもが死なないうちに、下って来てください。」
- 4:50 イエスは彼に言われた。「行きなさい。あなたの息子は治ります。」その人はイエスが語ったことばを信じて、帰って行った。
- 4:51 彼が下って行く途中、しもべたちが彼を迎えに来て、彼の息子が治ったことを告げた。
- 4:52 子どもが良くなった時刻を尋ねると、彼らは「昨日の第七の時に熱がひきました」と言った。
- 4:53 父親は、その時刻が、「あなたの息子は治る」とイエスが言われた時刻だと知り、彼自身も家の者たちもみな信じた。
- 4:54 イエスはユダヤを去ってガリラヤに来てから、これを第二のしるしとして行われた。

### 【祈りながら考えよう】

- (1) カナに滞在されていたイエスに訪ねて来たのは誰ですか。どういう理由で来たのですか。
- (2) カペナウムの役人はどのように信仰の成長を得ましたか。
- (3) カペナウムの役人とその家の者がみなイエスを信じたのはどうしてですか。

### 【解説】

#### (1) どんな人にも悩みがある

《イエスは再びガリラヤのカナに行かれた。イエスが水をぶどう酒にされた場所である。さてカペナウムに、ある王室の役人がいて、その息子が病気であった。この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞いて、イエスのところに行った。そして、下って来て息子を癒やして下さるよう願った。息子が死にかかっていたのである》(46-47節)

主イエスがガリラヤのカナに行かれると、そこに王室の役人がカペナウムからやって来た。彼には病気の息子がいた。その息子のいやしを主イエスに乞うためであった。

このことから分かることは、どんな人にも悩みがある。身分の低い人も高い人も、貧しい人も金持ちも、どんな人でも悩みごとを持っているということである。

むしろ、身分の高い人は、身分の低い人の持っていない悩みを持っているものである。金持ちも貧しい人の持っていない悩みを持っている。しかも、その悩みは、その人にとって切実なものである。

#### (2) 悩みが人を不幸にするとは限らない

しかしながら、悩み、苦しみがいつでも人を不幸にするとは限らない。この王室の役人も、その息子が死にそうな重病にかかったがために、主イエスのところへ助けを求めに来て、主の救いにあずかったことを考えれば、この重病は王室の役人を罪から救う1つの契機になったとさえ言える。だから、もしも大きな悩みを今抱えている人がいたとしても、それで絶望してはならない。健康は神から与えられた大きな祝福であるが、病気もまた信仰によってさらに大きな祝福となり得るし、今抱えている悩みがどんなに大きくても、それは信仰によって大きな祝福になり得る。悩みや苦しみの中で不幸や不満を言うのをやめよう。むしろ、それを通して、主がどのように素晴らしい祝福に変えて下さるかを期待し、主を見上げようではないか。

#### (3) 王室の役人の信仰

王室の役人が、主イエスのところに、息子のいやしを求めて来た時、彼の信仰はまだ弱々しいものであった。それは、主イエスに、「どうか子どもが死なないうちに、下って来てください」と言っていることから分かる。

つまり、主イエスが息子のところに来て下さらなければ、息子の病気は直らないといったものである。百人隊長のように、主の発せられる御言葉の権威に対する信仰は、まだ持ち合わせていなかった。それに、この王室の役人に対して主イエスが言われた御言葉にも、彼のまだ弱々しい信仰が指摘されている。

《あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じません》

この人の信仰はしるしと不思議を見なければ信じられない信仰であった。それだけではない。彼の次の言葉が、彼の信仰の幼稚さを如実に示している。

《主よ。どうか子どもが死なないうちに、下って来てください》

主イエス・キリストをその程度の人としか見ていなかったことである。主イエス・キリストがどんなに偉い預言者であったとしても、息子が死んでしまえば、もう手の施しようがないとしか考えていなかった。主が死人をよみがえらせる力を持っておられることは信じていなかった。

これは、ラザロが死んでしまってから、主イエス・キリストがマリアとマルタの家にやって来られた時、彼女たちが異口同音に言った言葉と同じである。

《主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに》

#### (4) 信仰の飛躍を経験させる

しかし、主は王室の役人に対して、次のように語っている。

《行きなさい。あなたの息子は治ります》

この主の御言葉は、王室の役人に対して、信仰の飛躍を経験させるためのものであった。この時、彼にとって、主の御言葉通り、カペナウムの自分の家へ帰って行くこともできた。そしてまた、自分の従来主張に固執して、主と一緒に来て下さるのでなければ帰らないと言い張ることもできた。

けれども、彼はここで1つの信仰の冒険をした。自説に固執することをやめ、主の語られたことに従った。その時、彼の信仰の1つの飛躍と成長があった。

この点で失敗する人が大勢いる。そのため、いつまで経っても一向に成長しないまま、弱い信仰でいる人である。たとえば、あなたが今しっかり握っているものを全部手放しなさいと言われたら、そうすることである。

自分の結婚についても、将来についても、また自分の家庭についても、自分の財産についても、自分のいのちについても、主のために一度全部手放す時、主はそれを何百倍にもして与えて下さる。その時、あなたの信仰は大きく飛躍、成長している。主は、次のように教えておられる。

《イエスは言われた。「まことに、あなたがたに言います。わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子ども、畑を捨てた者は、今この世で、迫害とともに、家、兄弟、姉妹、母、子ども、畑を百倍受け、来たるべき世で永遠のいのちを受けます》(マルコ10:29-30)

#### (5) 信仰のさらなる飛躍

その次に彼の信仰が飛躍するのは、彼が主イエスの言葉を信じ、帰途につき、途中で家から朗報を持ってやって来たしもべたちに会い、息子が直ったことを知った時である。

しかも、よく聞くと、その息子がよくなった時刻は、主が「あなたの息子は治ります」と言われたのと同じ時刻・第七の時(午後1時)であることを知った。この時、彼の信仰は大きく飛躍した。

このことは、信仰による冒険の結果であって、信仰による御言葉の体験と言ったらよい。信仰というものは、まず神の御言葉による正しい教理が最初に来なければいけない。しかし、いくら正しい教理をよく知っていたとしても、それは弱々しい信仰ではあっても、まだ本当の信仰と言うことはできない。

本当の信仰に至るためには、どうしても信仰による体験が必要である。信仰による体験を持たない人は、いつまで経っても、ちょっとしたことに躓き、疑う信仰である。

しかし、御言葉を体験した人の信仰は異なる。ちょっとやそっとのことでは動揺しない。この不動の信仰に至るためには、体験の繰り返しが必要である。自分の結婚の問題について、自分の将来の問題について、自分の財産の問題について、献金の問題について、その他あらゆることについて、絶えず御言葉に従い、御言葉の真実性を体験していく時、確かな不動の信仰に至ることができる。

この王室の役人は、信仰の飛躍とともに、家族全員がみな信仰を持つようになった。この節や新約聖書の同様な聖句からはっきりわかるのは、家族の中で、天に入る者とそうでない者とに分かれる、というのは、神のみこころではない。家族全部が御子を信じた(使徒16:15のルデヤ家族、使徒16:31-33看守の家族等)という事実を神は周到に記録にとどめておられる。

#### (6) このしるしの示していること

この奇蹟は、ガリラヤでの二番目のしるしであると言っている。最初のしるしもこの同じカナでなされたが、水を一瞬にしてぶどう酒に変えられることによって、主はご自分がこの自然界を造られ支配しておられる主であることを示された。

この王室の役人の息子のいやしの奇蹟によって、何が示されたであろうか。主イエスは、死にそうな病人をいやすことができるいのちの主であられること、しかもその病人に手が触れなくても、御言葉を発せられるだけでいやすことができになるということである。

主イエスは自然界を支配しておられるだけでなく、人にいのちを与える主であられることを、この奇蹟は示している。そのことを通し、イエスが神の子キリストであることが示され、それを通して信じる人が永遠のいのちを得るためにほかならない。

